
けいおん！～戦場でも歌うよ！～もう一つの歌

ダス・ライヒ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！～戦場でも歌うよ！～もう一つの歌

【Nコード】

N2146Y

【作者名】

ダス・ライヒ

【あらすじ】

けいおん！～戦場でも歌うよ！～の番外編。

唯達が戦う中、別の場所では駄目人間や戦鬨狂、武偵、兵士達、特殊部隊、国を思う者立ちが戦っていた。※作者、秋秋刀魚さんの許可を取っております。

参戦作品（前書き）

けいおん！の戦場でも歌うよの番外編です。

本編よりかなりエグイです、そして別の意味で酷いです、苦手な方は読むのを控えてください。

参戦作品

参戦作品

本編

けいおん！

ホームフロント（設定と一部のキャラのみ

番外編

カイジシリーズ

紺碧の艦隊シリーズ

旭日の艦隊

ジパング

沈黙の艦隊（一部のキャラのみ

緋弾アリアシリーズ

IS インフィニット・ストラトス（キャラのみ

戦場のヴァルキュリアシリーズ（キャラのみ

ブラックラグーン

エースコンバット（一部のキャラのみ

バトルフィールドシリーズ

メダル・オブ・オナーシリーズ

CODWW（日本兵のみ

学園黙示録（一部のキャラのみ

ゴットイーター（キャラのみ

スクールデイズ（主人公除外

戦争の幕開け（前書き）

一話目はカイジ編です。

※ややネタバレ注意です。

戦争の幕開け

ここは香川県某所。

そこにアツタシユケースを持つ男が居た。

その男の名は・・・伊藤カイジ・・・！

かつては自堕落な生活を送ってきた平凡な男、ある日突然借金が降りかかる。

仲間の保証人になったが原因であった、借金をチャラにする為に乗り込んだのが希望の船「エスポワール」カイジは悪魔の夜へいざわれる・・・！罨、裏切り、騙し合い、夜に行われる狂気のギャンブル・・・！そして幾多もの困難を乗り越え、カイジはたどり着く、闇の世界の魔王、帝愛グループ総帥兵藤和尊・・・！散っていった仲間の為にカイジは兵藤に勝負を挑む。

だが、カイジは敗北する・・・！カイジは負けるべきして負け、兵藤は勝つべくして勝つ、この狂気のギャンブルはカイジの血で終止符を打たれる・・・！

その後、敗者のカイジには闇医者による治療で借金ほさらに膨れ上がります。

ひたすら賭博で返済を試みようとすることも幾度もなく失敗、逃亡生活を送っている内に遠藤と再会する。

カイジは遠藤にギャンブルを紹介する依頼するがギャンブルは紹介されず、借金の元締めである帝愛グループの地下施設で強制労働をさせられる羽目になる。一日外出券を得るためにひたすら金を貯めようとするが、所属するE班班長・大槻の巧みな策略で金を使い果たす。大槻はさらにカイジに給料を前貸しし、自身が経営する「地下チンコロリン」に誘い込む。またしても大敗し、地下で借金生活に追い込まれるも、カイジは大槻のイカサマに気付き、自分と同じ

境遇にある通称「45組」と協力し班長・大槻の打倒の為に決起する。3ヶ月にも及ぶ貧窮生活耐え、カイジ等は大概に大勝負を仕掛ける。カイジの奇策により見事勝利し、外出に必要な金を得る。

45組とカイジを含めて6人全員の借金を返済する資金を得ることを託され、カイジは80万円を手で20日間の一時外出をする。裏カジノを探している最中、坂崎と呼ばれる男に出会う。

そこで紹介されたギャンブルは帝愛グループの裏カジノの置かれた1玉4000円のパチンコ「沼」

その「沼」で一攫千金を狙うも店長・一条の妨害により惨敗。八方塞がり状態になるもカイジは「沼」の攻略方法を閃く、計画遂行の為、大金が必要になった遠藤を仲間に引き入れる。

そしてカイジ、遠藤、坂崎は協力し再び「沼」に挑む・・・! 店長・一条の妨害にさらされながらも奇跡的に勝利し驚愕な大金を得る、3人でホテルで飲み明かすが、遠藤はカイジ・坂崎のグラスに睡眠薬を仕込み、カイジの半数の資金を奪い、ホテルから去る。

そして、カイジは地下に居る45組と石田光司の息子、石田広光を救出。

その半年後、「沼」で共闘した坂崎家に居候し、働きもせず墮落し日々を送っていた。

そんなカイジに愛想尽かした坂崎は手切れ金として300万円を渡し、説教して追い出す。

そして今現在に至る。

「(畜生、何も追い出さなくていいだろう。命の恩人なんだしさ。)
」

カイジは心の中でそう思う。だが、カイジには働きもしなかった為に追い出されるのは当たり前である。ふと、カイジは下に落ちた新聞紙を拾い上げ、それを見る。

『日本、再軍備か。野党から反発、各地で反対デモ発生。』

「俺が逃走生活を送っていた頃か、新聞もろくに見もしなかったな」
そう、言いつつ次のページを捲る。

『朝鮮統一、統一したのは北朝鮮。大朝鮮連邦と命名、韓国政府と軍、日本に亡命。』

『大朝鮮連邦、軍備拡大。政府、日本海に警戒警報。』

「だから再軍備した。て、訳だ、俺が地下に入っている間、世間ほとんどでもないことになってるな」

カイジは直ぐに納得する。だが、その時、通行に男が南東を指さす。

「おい、あれ。」

「あ？」

ざわ・・・ざわ・・・

ざわ・・・

ざわ・・・ざわ・・・

周りが異様な空気に包まれる、カイジは男が指さした方向を見た。

「あそこは東京辺りか、っ！？何だあの光は！？」

それは日本人が誰でも知る、光・・・！
この光は正しく、死の光・・・！核の炎でもあつた・・・！

戦争の幕開け（後書き）

第一話は戦場黙示録カイジです。

時間列は放課後ティータイムと同じです。

誤字脱字があれば感想にて・・・！

空からの死

核爆発が起き、カイジを含む全員が東京方面の巨大なキノコ雲をみていた。

「あれが、核の爆発・・・！」

この時、カイジは初めて核爆発を生で見た。
一生見られないと思っていた光景が目の前で・・・！

ざわ・・・ざわ・・・

ざわ・・・

ざわ・・・ざわ・・・

その時、カイジ等を我に返す声があがる。

「都民の皆さん、速やかに避難してください！ 朝鮮の軍用機が日本の領空に侵入しております。ここも攻撃目標になる可能性が高いのです。直ぐに避難の準備を！」

警官の避難指示で我に返ったカイジ、その場に居る市民達も東京方面から目を離す。

そしてカイジはあることを思いつく。

「（そうだ、坂崎のおっちゃん達を迎えに行かねえと。）」

カイジはそう思ったが、あることを思い出し躊躇する。

「（やっぱり止めておくか、美心が居るからな……。それに向こうもとつくに避難してるみていだし。」

カイジが躊躇した理由、それは坂崎の娘・美心。

スタイルは抜群なのだが顔は坂崎に限りなく似ており、カイジに恋心を寄せている。

もし迎えに行ってもしたら余計にカイジに思いを寄せるようになってしまう。

恐らく娘に激愛している坂崎も黙っているハズが無い。カイジはそう思い坂崎一家のことは迎えに行くのを止めるのであった。

自衛軍のトラックや装甲車、ジープ、対空車両が群れを列をなして走っていた。

恐らく近くの駐屯所から来たのだろう、上空にはヘリが数機ほど確認できる。トラックの荷台はそれぞれに弾薬や兵士が積まれているのが見える、そこで市民の話し声が聞こえてくる。

「おい、爆発以前のラジオを聞いたんだけど朝鮮の軍用機が日本に向かってくるそうだ」

「マジかよ、こりゃ間違いなく戦争だな。」

「ここが戦場にならん限り、俺達は無事だ。もし戦場にならん場合、荷物を戻す羽目になる」

「それもそうだが・・・」

「何とも他愛も無い話であった」と心の中で思うカイジ、スピーカーを付けた車両から促している。

《本日午後3時半頃東京にて核爆発が起きました。同時に大朝鮮連

邦軍機が日本の領空内に侵入、市民の皆さんは至急加賀駐屯所に避難してください。繰り返します」

時間がある程度たった頃、カイジの耳に少年らしき声が聞こえた、声がある方向を見ると小太りな眼鏡を掛けた少年が幼い子供の手を握りながら道行く人に声を掛けていていた。幼い子供の方をよく見ると女の子と確認できる、カイジは事情を聞くべくそちらに向かう。

「おい坊主。」

と、声を掛けてみる。

「は、はい僕ですか・・・？」

「ああ、そうだ。お前だ、その子は妹か？」

「いえ、違います。この子は迷子なんで、それでこの子の親を捜しているんです。」

「そうか、じゃあ一緒に探すよ」

「あ、ありがとうございます！」

「そんなに大きな声を上げなくても・・・」

照れるカイジ。

その後、カイジ達は女の子の親を捜す。その最中、思わぬ再会をする。

再会した人物の名は三好智広、かつて帝愛の地下施設で45組として共に戦った男・・・！

「カイジさん！」

「み、三好！」

「知り合いですか？」

と、太った少年が問う。

「何かって古い知り合いだよ、なあ三好」

「へへへ、カイジさん・・・」

誰も信じないであろう、自分達が大手企業の地下施設で強制労働をしていたことも・・・！

「それよりこの子。」

「ありすちゃんじゃないか、一体何処に居たんですか？」

「駐屯所の前でこのふつとちよと一緒に居た。お前の親戚か？」

「希理さんの娘さんですよ。さあ、駐屯所の前でパパとママが探していたよ、一緒に行こうか？」

「うん！」

ありすと呼ばれた女の子は三好の問いに頷く、三好はカイジを誘おうとするがカイジは断る。

眼鏡の少年は平野コータと名乗り、三好と一緒に駐屯所に向かって

いた。

またしばらくたった後。

駐屯所まで歩いている最中、突然そこら中に大音量が響き渡り、辺りが暗くなった。

空を見上げると覆い尽くすほどの輸送機や攻撃機の編隊がエンジン音を響かせ上空を加賀上空を飛行していた・・・！

その数、輸送機と攻撃機、護衛の戦闘機を合わせると250機・・・！

大編隊から降下した落下傘の数はとても計り知れない・・・！

《対空射撃用意！》

対空車両が上空に照準を向け、自衛軍の兵士達が降下兵に小銃を向ける。

人々は慌てて兵士達から逃げるようにに離れていく。

「撃てい！」

一斉に放たれた銃弾や対空砲の弾は上空の輸送機や降下兵に当たっていき、中には対空砲の弾が命中し、上半身が真っ二つになる者も居た・・・！

カイジはただ突っ立てるだけである・・・！

「これ、戦争なのか・・・？ 本当の戦争なのか・・・？」

その時、カイジの服に赤い液体が付く、それは染みとなり広がる。そう、かつては自分も流して勝利した体に流れる液体その名も血液・

・・・！既に見慣れているカイジだったがあ然していた。
突如、装甲車が爆発する。降下兵が放った対戦車ロケット（RPG）
だ・・・！

「敵の歩兵だゝ！」

自衛軍の一人が降下兵を小銃で撃ち殺す。降下兵は力尽きその場で倒れる。

「敵の攻撃機や！撃ち落とせ！」

敵の攻撃機がこちらに向かってきた、対空砲は直ぐに目標に撃つ。
しかし、特攻を仕掛けるつもりであるらしく幾ら撃たれようが止まらない・・・！

自衛軍の一人の兵士がカイジの存在に気付いたのか突然カイジの手を掴み通りに滑り込む・・・！

「伏せろーーー！」

耳が遠くなる様な爆発音が聞こえた。

自衛軍兵士とカイジは無事だがしかし銃声は止まっていた、見るとそこには焼き焦げた装甲車や対空車両、特攻した攻撃機。さらには自衛軍の兵士の四方や肉の塊があった。

「う、げえゝゝ」

カイジは嘔吐した、目の前にグロテスクな光景が広がっているからだ、先ほどの自衛軍の兵士はヘルメット越しに手を耳に付けて何か喋っている。

「こちらD中隊第4小隊長雨宮リンドウ少尉。部隊は自分を残し敵の特攻で全滅、至急新しい座標の指示を願う、それと民間人が一名。」

『雨宮少尉、民間人と一緒に直ちに駐屯所に戻れ、それと認識票を忘れるな』

「了解、認識票を回収しだい駐屯所に戻ります。オワリ、」

通信を終えた雨宮と呼ばれる士官は自衛軍の兵士の死体から認識票を取っていく。

カイジはそれをただ見ていた。やがてその士官はカイジに近づきこう言った。

「自分は自衛軍の雨宮であります、これから駐屯所まで貴方を護衛します。しっかり付いてきてください」

手を伸ばすリンドウ、カイジは迷うことも無くその手を握った・・・！

上空を見れば自衛軍の戦闘機部隊と大朝鮮軍の戦闘機部隊が空中戦闘ドックファイトを繰り広げていた・・・！

空からの死（後書き）

雨宮さんをご存じですか？

あのモンハンの同じようなゲームのキャラです。

誤字脱字があれば感想にて・・・！

殺戮地帯（キルゾーン）（前書き）

ダス・ライヒ「上手く書けたらノーカウント、ノーカウントなんだ
！」

カイジ・45組・遠藤・坂崎・班長・一条「……………」
……………」

殺戮地帯（キルゾーン）

カイジはリンドウが認識票を死体から取っていくのを眺めていたカイジ。

しかしあることを思い出す・・・それは・・・金・・・！

「そうだ、金！金の入ったケースは！」

カイジは見つけた・・・！アツタシユケースごと燃え上がる、坂崎の手切れ金300万！

思わず向かう・・・！だが・・・リンドウに止められる！

「か、金が！全財産が！ああ、何で俺だけ、何で俺だけなんだよ・・・！」

涙する・・・！目の前で燃える全財産・・・！この金が無ければカイジは一文無しである！

「やめてください！危険です！お金のことは諦めてください！」

リンドウは必死に静止する、カイジは堅いコンクリートに肘をつき、そのまま涙していた。

やがて気を取り直し、カイジはリンドウと一緒に駐屯所に向かう・・・！

「止まって、朝鮮語か・・・？数は6人か7人くらいか、武器はAKS74u・・・88式歩兵銃」

「おい、向こう側に居るのは敵か、それとも味方か？」

「いえ、喋ってる言葉は朝鮮語です。排除してきます、ここでお待ちを」

声をかける暇も無く、リンドウは89式小銃のセレクターレバーをタに合わせ通りへ出て行く。銃声が鳴り響き、やがて続々と同じような音が通りから鳴り響く・・・！通りで銃撃戦が起こる中、後ろから微かに声が聞こえてくるのに気付く「これは日本語では無い、朝鮮語だ！」と、心の中で思い。待ち伏せるため、武器になる物を探す。

「（これなら、ヘルメットをがち割ることくらいならできる・・・！）」

カイジは金槌を見つける。恐らく避難途中に落とした物だろう、急いでいるために取る暇が無かったであろう。そう思いカイジは待ち伏せに的確な位置に付き、相手が来るまでひたすら待つ・・・！

「（声からして敵は一人、しかし殺れるのか？相手は兵士、しかも敵地に降下してくるから恐らくかなりの訓練を受けているハズだ。チャンスは一度、失敗すれば俺とリンドウって言う兵隊も死ぬ・・・！）」

じよじよに敵の足音が聞こえてくる。敵兵が近づいた瞬間、カイジは敵兵の頭に金槌を思いっきり叩きこんだ・・・！

ドン！

金槌を叩き込まれた敵兵は頭から血を流した。だが、敵兵は倒れもせず、ナイフを取り出しカイジに襲いかかって

きた・・・！

カイジはリンドウに助けを呼ぼうとするが銃撃音はまだ終わっていない、まだ銃撃戦が続いていると言うことだ。敵兵が右手に持つナイフを必死に抑えていたが相手は精鋭の空挺部隊の兵士、その上カイジは自堕落な生活を送ってきた駄目人間、どちらが勝つと言えば空挺兵。だがカイジは必勝法を得る。

敵兵が付いている手榴弾のピンに目を付けた。「これなら勝てる・・・！」そう思い、カイジは相手を押し、手榴弾のピンに手を伸ばし、それを引き抜いた！

敵兵は慌てて装備品を外そうとするが間に合わず、爆発！気が付けば辺り一面が血で真っ赤となり、本来体の中にある臓器がそこら中にぶちまけられ、グロテスクな光景が広がっていた。

「これ、俺が殺したんだな・・・？」

カイジはただあ然していた。

その内銃撃戦を終え腕にかすり傷を負ったリンドウが戻ってきた。

「お待たせしました！すぐに駐屯所、こ、これは・・・！」

リンドウもグロテスクな光景が目に入る。すぐに気を取り直し、カイジを連れて別の場所へ移動する。

街中に銃声や爆発音が聞こえて来る中、一番近い方から銃撃音が聞こえてくる。リンドウは合図らしき言葉を叫ぶ。

「雷！」

カイジは訳が分からなかったが、これは軍が敵を見分ける合言葉である。それに合った合言葉が返ってこない場合、敵であると言うことになる。（現在の合い言葉は雷と雷鳴

「雷鳴！」

返ってく来た、つまり味方。リンドウはカイジを連れ、味方部隊と合流する。

隊長らしき男がいきなりこちらに向かって怒鳴り声を上げる。

「何で民間人を連れてきた！早く安全地帯に連れて行け！」

「しかし大尉、この状況でどこに隠せと、ここには700人程が降下します！それに奴らは民間人まで撃ってる、知らぬ間に死んでるかもしれない！」

「仕方ない、よしその民間人に向こうにある墜落したコブラのパイロットを救出させよう。各員援護射撃の準備だ！」

「一体、何を言ってるんですか！？彼は民k」

「えーい、五月蠅い！とにかく貴重な人材をこれ以上失うわけにはいかん！」

なんとこの士官、カイジに銃撃戦のど真ん中に墜落したヘリのパイロットを救出させようと言うのだ、かなりめっちゃくちゃな士官である。

「そう言うことです。援護射撃はきっちりやりますので、部下を3人程護衛に付かせますので行ってください。パイロットは女性です。で少しは軽いと思います。直也！佐藤！小賀！この民間人をコブラまでお送りしろ！もし、断った場合それなりの処置を取らせてもらいます。」

カイジは従うしかなかった、何故ならその士官が9mm拳銃を向けているからだ・・・！

呼ばれた自衛軍の兵士3人がバリケードから身を乗り出そうと準備している。

リンドウは「めちゃくちゃだ！おかしすぎる！」と叫んでいるが治療に來た衛生兵に黙らされる。

「1、2、3で行きます！我々から離れないでください！」

「言われずとも離れるかよ！」

カイジは若い兵士に大声で返答する。

そしてカイジと兵士等はバリケードから身を乗り出し、墜落したヘリへ走る！

同時に自衛軍の兵士達が援護射撃を開始する！

「撃てえー！援護射撃だ！」

味方の攻撃に当たるのではないか？と思いつつ、カイジと三人は走る！ただひたすら走る！

走ってる内に墜落したヘリに知らぬ間に付いていた。コクピット辺りを見ると、女性パイロットが足を押さえながら悶え苦しんでいた。カイジは重い装備品を女性パイロットから外し、そして持ち上げる。一人の自衛軍兵士が小声で「大尉は軍法会議だな」と言っていたが銃声音が響く中間こえたくるはずもない。

「全力で走ってください！」

自衛軍兵士のそれぞれが89式小銃や分隊支援火器M249を敵に向かって乱射する！

カイジは女性パイロットを持ち上げながら味方の陣地まで全力疾走する！

そしてバリケードを飛び越え、到達！それと同時に爆破音が各地に響き渡り前方に大型ヘリが見える。

「ありゃ、第一師団の連中だな。」

誰かが呟いたが、誰も気にせず。女性パイロットを下ろしたカイジはただ空を見上げていた・・・！

殺戮地帯（キルゾーン）（後書き）

COD4やナチスがアメリカ本土に攻めてくる戦争ゲームを参考にしております

爆破後の東京（前書き）

本編が更新されたのでうp。

緋弾のアリアと紺碧の艦隊のあの人が参戦（設定に変更あり、注意されたし。

爆破後の東京

そこは嘗て日本の首都『東京』があった場所。

上空に飛来する黒い大型戦闘機があった。

それは中国が総力を決して開発したステルス爆撃機『殲20』である。

開発が難航し、さらには情報が漏洩すると言う事態に発展、各国はもう開発は中止されたと思われたが、中国空軍は本気であった。巨万の費用と努力を重ねた結果、開発に成功。今実上空を飛んでいるのは紛れもなく事実である。そのパイロットの任務は武偵の抹殺である。

「遂に日帝の工作員共に鉄槌を下す時が来たか。日帝め、これが南京の敵だ！」

ちなみに彼が言う、工作員、とは武装探偵のことである。

武力を行使する探偵、これが彼ら反日国家の反感を買ったのかしれない。

殲20は灰屋と化した東京武偵学校に進路を取った。

「とは言った物の、凄いなステルスと言うのは。あつという間に日帝の防空網を突破出来たぜ。まあ、朝鮮連邦が攻めて来てる訳だからな、こっちに手が回らんかっただろう」

もう一人のパイロットが喋る。

このステルス爆撃機は本家F17と同じ二人乗りだからだ。

「どうせみんな放射能で死んでるんだ、何も試作機を敵地に送るこ

ともないだろう」

「っ・・・・・・・・」

もう一人のパイロットはその台詞を聞いて黙った。

パイロットはこう思う「何故こんな敵地へ送るのか、それも新型機なのに」と思い詰めた瞬間。

「レーダーに反応が！」

「まさか、こいつはステルス機だぜ。こんな場所に日帝の戦闘機が・
・・」

「ち、違うっ！こいつはF15じゃない！」

彼ら殲20のパイロット達は慌てふためいていた。

何故なら試作段階であるF35が高速で接近しているからだ。

「ふ、振り切れ！とにかく振り切るんだっ！」

殲20はその場から離脱しようとしたが、速度で勝るF35にはかなはない。

「大丈夫だ、こいつはステルス機だからミサイルには補則されない」

「じゃあ何で見つかるんだ！こいつはステルスのハズだろう！」

コクピットでは口論が始まっていた。

それを終わらせる様にF35のパイロットは機銃のロックを解除し、引き金に指を当てる。

照準に殲20が合うとパイロットは引き金を引いた。

目標にGAU122Aが吸い込まれる様に当たり、部品が剥がれ落ちていき、エンジンから火が出る。

「被弾した！被弾した！火、火が・・・」

「うわぁー、助けてくれ！」

殲20は後部が火だるまとなり、焼け野原と化した東京へ墜落した。

一方東京湾海中では既に無いとされていた旧日本帝国海軍の巡洋潜水艦伊号潜水艦と乙型改の計3隻が停止していた。

「脅威は去ったか、東に進路を取れ。目的地は千葉県だ。」

「了解、東に60度回頭。到達目的千葉県館山港」

潜水艦の艦隊は左に回頭し、東へと進路を取った。

艦内では部下らしき男が上官らしき男に質問をしていた。

「高野会長、何故西に進路を取らないのですか？」

「西は最悪なことに朝鮮に近い、それによりかなりの戦力が投入されてるだろう。私の予想では300万近い兵力が投入されていると思うが・・・」

高野と呼ばれる男が部下に答える。

この男の名は高野五十六、二度所属を変えた男である。最初は海上自衛隊であったが、その腕を買われ特殊作戦群に抜擢、何らかの理由で除隊し、その経験で東京武偵学校の校長に就任した。

ちなみに彼は日本右翼組織『紺碧会』の会長である。

「私も思っていたところです、高野さん」

突然現れ声を掛け来た男。

名は大石蔵良、彼も元特殊作戦群で現武偵学校の教師で教科は社会、そして情報科の教官。海外からはアドミラル大石と呼ばれている。

「大石か、一体何をしに来た？」

高野は大いに大石を警戒していた。

何故なら高野がまだ特殊作戦群いた頃大石がある作戦を考案してきたからだ。その作戦は奇想天外であり、また次々と同じような物を考案してきたため、高野からは不気味で恐ろしい男と呼ばれている。彼も紺碧会のメンバーである。

「嫌々、持っていた情報科のパソコンを弄っていたら貴方の予想がどうやらかしたみたいです。それも最悪な形で」

大石はノートパソコンを高野に見せた。

既に中国地方や近畿北部、九州北部は敵の制圧下に置かれていた。自衛軍各方面軍は四国や九州南部や東日本に撤退しており、これは西日本がほぼ大朝鮮連邦に占領されたことを意味する。大石はノートパソコンを閉じて口を開く。

「私の予想では政府は徴兵を始めるでしょう。そして武装探偵も徴兵され、下士官か士官に抜擢されるかと思えます。我々もいずれか・」

「そうか、また特殊作戦群に引っ張られるだろうが仕方がない、こ

れは日本を守る為の戦争だ。目的地館山港！」

「故郷^{くに}に帰れるのか・・・全速前進！」

高野の怒号で3隻の潜水艦は千葉県に進路を取るのであった。

爆破後の東京（後書き）

次回はカイジ君の訓練です。

訓練と蠢く影（前書き）

ヤンデレの原点が参戦します。

訓練と蠢く影

「起きろ！馬鹿共！」

教官がバケツを気の棒を叩きカイジ達訓練生を起こす。

そう、カイジは徴兵されたのだ。15歳から35歳までの強制徴兵・

2段ベツトから起きた訓練生達は着替えを終え、早速訓練を始める。

「さあ、早く走れ！敵さんは待っちゃくれんぞい！」

カイジ等訓練生は予め設置された障害物を乗り越えて行く。

別の訓練場で遅れを取る者が居た。避難してる途中、偶然会った眼鏡を掛けた小太りな少年だ。

「この眼鏡豚め！何しとるか、早う走らんかい！」

「は、はい！」

教官に怒鳴られる少年。

彼はどうやら運動不足らしい、と思っているとカイジも担当の教官に怒鳴られる。

「お前！何止まってる！早く次へ行け！」

次の訓練は大きな壁を綱を使って上る訓練。

カイジら訓練生等は手に綱を掛けて上に上がり次の訓練場に向かって走る。

各訓練場からも怒号や銃声が響き渡る。かつてはただの高等学校で

あったが今では陸軍の学校と成り、15〜18歳までは昼は通常の学業を励み、放課後と土日は訓練。しかしカイジ等青年達（19〜35歳）はとっくに高校を卒業をしている為、学業は必要は無く代わりに多忙な訓練が待っている。

そして訓練生達は少しばかりの休憩を取り射撃訓練を始める。

「これより射撃訓練を行う。今の時代は銃が主流だ、敵も銃を使う。銃が誰にでも撃てると思うな！ちゃんと的に当てなければ兵士とは呼べん！もう一度言う、的に当てられん奴は兵士とは呼べん！さあ、壁に掛けてある64式を取れ。まずは腰だめで射撃しろ！」

訓練生達は言われるまま64式小銃を取る。

カイジは持った瞬間少し重みと感じた。女性の訓練生は重たそうに持ち上げる。

「なんだこれ少しばかり重いぞ。弾が入ってるからか？」

「当たり前だ、7・62ミリ弾が入ってるからな。おっと言い忘れていた。ロクコンは壊れる可能性があるぞ。何せ急いで造ったからな、俺も新兵時代分解作業に苦労したもんだ。後、安全装置外しておけよ。それとレバーはタの部分に合わせるんだ、こうやってな」

教官は見せるように64式小銃のレバーをアの穴から出しタの穴に突起を入れ込んだ。

そして教官は64式を的に向かって撃つ。結果は弾は的の中央には命中せず周囲に当たっただけ。

「よし、お前等もやってみろ」

訓練生達は教官と同じように64式小銃の安全装置を外し、腰だめで撃ち始める。

各自1発ずつ撃つと教官が「射撃中止!」と大声を出す。訓練生等は射撃を中止する。

「よし、次は照準器を除いて射撃しろ。分からん奴には教えてやる、上に付いてる穴が空いてる奴だ!」

カイジ等は照準器覗きの中央に撃つ。何人かは外れたり当たったりしているが約何名かが「お前は分隊選抜射手に向いてるな」と言われている。教官は再び射撃中止を上げると今度は「タからレに合わせろ」と言う。教官の指示通りタからレにレバーを合わせて撃つと弾が猛烈に飛び強烈な反動が肩を襲う。

「とうだ痛いか?これが連発射撃だ。良く訓練された兵士なら十分に扱えるぞ」

午後6時を廻ると訓練生達は各兵舎に戻って行く。

そして食堂で粗末な夕食を食べる中、カイジはまた思わぬ再会を果たす。

「か、カイジさん?」

「ふ、古畑、てめー!」

カイジはある男に殴り掛かろうとするが周りに止められる。

その男の名は古畑武志。カイジに借金を背負わせる。かつて希望の船「エスポワール」で共に参加。

周りに流されやすい性格の為仲間にもそのかされカイジを裏切る、復活したカイジに仲間もろとも制裁をうけ、借金を返済できず。船で新たな借金を背負いその後の消息は不明。「裏ぎった男が何故ここに居る」とカイジは怒りをあらわにする。

「てめえ！どの面下げて出てきやがった！」

「か、カイジさん！落ち着いて！」

「そ、そうですよ！カイジさん！話を」

三好に静止されるカイジ、周りも「何事か？」と視線がカイジ等に集中する。

古畑の話によるとどうやら借金を返済をするために自ら志願した様だ。志願すればそれなりの給料を貰える。高額な給料を為、借金持ちは自ら志願することが多い。カイジ達は食事に戻り、周りも食事に戻った。

午後8時 某所桂財閥系本部

ここに桂財閥の主要な人間が集まっていた。

彼らに大事な跡継ぎが次々と強制的に徴兵され、危機に陥っていた。彼ら桂財閥は自衛軍の支援している財閥の一つである。「軍事支援を断ち切ってしまうぞ」と軍を脅したが「その様なことをすれば国家反逆罪で主要全員を逮捕する」と返答があった為、迂闊に手が出せない、そして今残っている跡継ぎを安全地帯である本部に集め、財閥の継続を計ろうとしているのだ。

「後は、言葉ちゃんだけだな。」

「ええ、そうね。」

「それにしても大丈夫なのかね？死体を損壊した挙げ句一人殺したんだろ？そんな人殺し少年院から出してr」

「こら、彼女だって大切な跡継ぎだ！悪いのはクズ野郎とアパズレなんだ！言葉ちゃんは悪くない！」

「そ、そうね。言葉ちゃんは悪くないわ、それより言葉ちゃんが入ってる少年院からもう出してあげた？あの子・無事だといいいけど・」

「ああ、隆治が迎えに行ってる。ん？」

携帯電話鳴りそれに出る桂家の男、それに出た男は急に顔が青ざめる。

「い、一体何が？」

「た、大変だ……。言葉ちゃんが、居ない。」

「ど、どう言うことだ！？まさか混乱に乗じて逃げ出したとでも言うのか！」

桂家の当主らしき老人が怒鳴り上げる。

「分かりません、隆治が言うには3時間前に長髪の女が引き取ったと」

「ええい、一体何者なんだ？その女は、武偵に依頼して調べさせろ」

「無理ですよ。武偵は皆徴兵されて戦争終結まで依頼を受けないと、言っていますし」

「なら、探偵にでも」

「む、無理です。探偵も何でも屋もみんな連絡が途絶えていて」

「く、くそ！一体何が起きていると言うのだ！」

桂家の当主、桂豪次郎は怒りを露わにしていた。

その謎の女は何者なのか？桂家はその疑問に捕らわれていた。

訓練と蠢く影（後書き）

次回、カイジはいきなり激戦に放り出されます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2146y/>

けいおん！～戦場でも歌うよ！～もう一つの歌

2011年12月3日19時52分発行